

つながる・つなげる ～合言葉は子どもたちの笑顔～



「地域とともにある学校」～ふるさと教育・学びの往還をキーワードに～

社会教育スタッフ 企画幹 福原 英 忠

お待たせしました。今号は「社会教育特集号」です。時代の変化に伴い、学校と地域の在り方が変化している今、“これからの時代を生き抜く力の育成（学校だけでは得られない知識・経験・能力）”、“地域住民が自ら地域を創っていく”という“主体的な意識”への転換が求められています。これらの求めに応じるために、『目標やビジョンを共有し、「地域とともにある学校づくり」と「学校を核とした地域づくり」を併せて実現していく。』といった学校と地域が連携・協働した取組を、益田管内においても進めています。子どもたちの笑顔のために、各市町をつながる・つなげる取組を、管内各市町の派遣社会教育主事が“ふるさと教育”、“学びの往還”をキーワードに紹介します。



【その前に・・・】

○ふるさと教育のおさらい

「ふるさとへの愛着や誇りを持ち、島根の未来を創る人」をめざし、地域のひと・もの・ことを活かし、ふるさとへの愛着・誇り・貢献意欲とともに確かな学力・実行力を育む取組を学校と地域で進めています。今年度からのテーマは『「実行力」と「確かな学力」の定着』です。

○派遣社会教育主事を改めて紹介



【益田市】大峠直也 ・ 桐 雅幸 【津和野町】水上真悟 【吉賀町】坂田哲朗

いつでも、どんなときでも、丁寧に、誠実に、全力で対応します。

派遣社会教育主事は、各市町教育委員会事務局のみなさんとともに、「地域とともにある学校」、「学校を核とした地域づくり」ために、日々、子どもを真ん中に据えた取組を進めています。相談したいこと等ありましたら、何なりとご連絡ください。

学校と地域の学びの往還について

益田市教育委員会 派遣社会教育主事 桐 雅 幸

「社会に開かれた教育課程」が学習指導要領の基本的な理念として掲げられ、“よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創る”ために、各学校が地域と連携・協働・協力しながら、様々な取り組みがなされてきています。その中で、今回は、益田市立益田東中学校の取組を紹介します。

益田東中学校では、『6かるプロジェクト』という総合的な学習の時間の授業を、2年生を中心に全学年で設定し、学習のめあてを「**つかる・わかる・とっかかる・つながる・みつかる・わきあがる**」としています。ローカル（地域）での学びを通して、めあてが達成できるように、地域ぐるみで行われている学習活動です。益田東中学校区には3つの公民館（益田・豊川・真砂）が存在し、この3館を中心に地域での学びが創られています。

（詳細はしまねの教育情報 Web「EIOS」の総合的な学習の時間ガイドブックをご覧ください）

この学習活動には、特筆すべきことが3点あります。

1点目は、この学習活動の目的を学校と地域（公民館）が共有していることです。担当職員と公民館主事との対話の中で、学習活動のねらいや地域の願いをお互いが理解し、この授業を活用して、一緒に学びを創るパートナーとして活動しています。

2点目は、学習活動の随所に対話活動があることです。自分が考えていることや体験したことを他者にアウトプットする経験は、より学びを深めるポイントになっています。具体的には、地域の大人と対話する「6かるトーク」を設定し、多様な他者と関わり、つながるきっかけにもなっています。



3点目は、学校の授業だけで完結させていないということです。中学校では、夏季休業中に「6かるクエスト」と称して、地域のボランティア活動に参加し、その難易度に応じて星を獲得するという遊び心のある仕掛けを行っています。公民館（地域）では、あえて授業内で完結しない活動を設計するなどの工夫をして、生徒の意欲や好奇心をくすぐる活動を面白がって創り出し、学校外での活動に生徒が主体的に参加できるように心がけています。

学校と地域を行ったり来たりする学習活動を通して、授業で学んだことを地域で生かしたり、地域で経験したことを授業に結びつけたりするなど、“**学びの往還**”が生まれています。このような活動の中で、「地域の課題が自分で見つけられたので、解決したいと強く思えた。」というような生徒の感想に出会いました。まさしく確かな学力（自分で課題を見つけ、よりよく問題解決する資質）が育まれていると感じています。



地域だからこそ、経験できることや学べることがあります。これを学校の授業と紐づけることで、“**学びの往還**”が生まれます。このページをお読みになられて少しでもワクワクした方は、ぜひ各市町の派遣社会教育主事にご連絡ください。

教育課程内と教育課程外を繋いだ『ふるさと教育』 ～さんま夏祭りでの実践の場の創出～

津和野町教育委員会 派遣社会教育主事 水上真悟

津和野町では、地域全体で子どもを育む環境づくりや、保育園や学校が校種を超えて連携し、つながりのある学びの実現を目指した「0歳児からのひとづくりプログラム」を推進しています。町で“育てたいひと”として「大人になっても自ら学び続けるひと」を掲げ、町内全体で学校と地域が連携・協働して、多様な『実践の場』づくりを行なっています。それらの中から今回は津和野町立津和野小学校の事例を紹介します。

【R4年度津和野小学校5年生総合的な学習の時間×R5年度放課後さんま※1】

昨年度、津和野小学校の5年生は総合的な学習の時間において「ふるさと津和野で町おこし」をテーマに学習に取り組みました。学習を進めて行く中で、子どもたちは地域課題を我が事と捉え、主体的に考え対話する姿が見られました。そのような学習を通して、子どもたちから「津和野町の人を幸せにすることが大切だから、津和野町の人より元気になり、もっと幸せな気持ちになるためにお祭りを開催したい。」という思いが生まれました。そこで、学習の伴走者として授業に入り、児童にアドバイスをしていた、地域で活動している放課後さんまが、今年の夏に6年生児童（昨年度の5年生児童）を対象に『実践の場』を学校外で創ることとしました。

（※1）地域で放課後の子どもの居場所づくりや体験活動を行なっている団体

<『実践の場』の実際「津和野盆踊りまつり×さんま夏まつり」>

津和野町で行われる盆踊りまつりの日に合わせ出店することにして、対象となる6年生児童に出店スタッフの募集をかけたところ6名の応募がありました。そのメンバーで盆踊りまつり当日に向け、ねらいの確認や出店の準備、運営などの話し合いを重ねました。祭り当日は町内外から多くの来場者があり、児童が考え 出店した『射的』『わたがし』『ポップコーン』『輪投げ』『かき氷』の出店を楽しんでい



【輪投げの様子】

盆踊りまつり実施後、主催者から「子どもたちがこうして伝統める盆踊り大会で出店してくれたことが、すごく嬉しかった。子どもが出店をしていることで、人が人を呼ぶ感じがあった。また、来年もこうして地域全体で盛り上げていけたら嬉しい。」という言葉をいただき、地域住民から参画した子どもたちに価値づけをしてもらうことができました。

今回紹介した事例は、『実践の場』を地域で創ることで、小学校での学びを活かして実行力を育むと共に、『まちの人の温かさ』や『達成感による地域への貢献意欲の向上』など、多様な価値にふれさせることができました。

この他にも津和野町では、教育課程内と教育課程外を繋いだ『ふるさと教育』が様々な形で創られています。『まち全体が学びの場』を合言葉に掲げている津和野町に、子どもの学びを学校と地域が共有し、連携・協働した『実践の場』が増えていくよう、今後も働きかけていきたいと思ひます。

探究的な学習とふるさと教育～六日市中の取組から～

吉賀町教育委員会 派遣社会教育主事 坂田哲朗

吉賀町立六日市中学校（1年生）では、今年度、総合的な学習の時間において「地域を知る」をテーマに学習を行ってきました。これまでの学習の流れは以下の通りです。

- ① 様々な団体の職員から地域の魅力・課題や自団体の取組のねらい等を聞く。
- ② 地域住民との対話活動を通して、地域の良さや困り感、願いなどを調べる。
- ③ 各団体の取組を実際に体験する。
- ④ 課題解決に向けて生徒が考えたアイデア・企画をプレゼンする。

役場企画課や観光協会、タカラバ（高津川を愛してる会）、校区内2つの公民館と協働し、このサイクルを繰り返し回しました。その活動の中から、六日市公民館と協働した「ゆるり広場」に関する取組を紹介します。

まず、生徒は、公民館館長・主事から公民館の役割と、「ゆるり広場（*地域住民の交流と居場所づくりを目指したオープンスペース）」に取り組む背景やねらいについて話を聞きました（①）。そして、実際にゆるり広場で地域住民が活動しているところに参加し、その場を体験する（③）と共に、地域住民との対話で活動内容のニーズを把握しました（②）。ここまでの①②③の学びをもとに、生徒は「ゆるり広場」で行う活動の企画書を作成し、公民館に対してプレゼンを行いました（④）。この取組の素晴らしいところは、そのプレゼンだけに留まらずその活動を実現させたことです。公民館主事が伴走者となり、質問や助言をすることで中身をブラッシュアップさせ、地域の大人や保育園児を対象とした事業として実施できました。

今年度のこれらの学習を通して、生徒は「地域のことを本気で考え、行動する大人」の熱を感じ、その人たちを身近に感じるようになっていました。豊かな体験と豊かな出会いを通して、様々なロールモデルに触れることができました。ある生徒が書いた感想です。



吉賀町の学習をするって聞いたときは「めちゃくちゃ知ってるけど」と思っていたけど、学習するうちに自分が知らなかった課題やそれを解決しようとする人がいて、みんなそれを楽しんでいるんだなと思うようになりました。今日みたいに相手を楽しんでくれると企画する側も楽しいから、もっといろんな活動してみたいと思いました。

今回の学習では『聞く⇒対話⇒体験⇒整理⇒プレゼン⇒反響・振り返り』という短いサイクルを、相手を変えながら何度も回してきました。その結果、生徒の企画力・プレゼン力にも成長が見られたと教職員のみなさんは評価しています。また、六日市中学校では今年度、総合的な学習の時間をデザインし直し、3年間で系統的に探究力を身に付けられるようにしました。上記の1年生達が来年度も、地域での体験・出会いを通してさらに質の高い探究を行っていくことでしょうか。このように「生徒に育てたい力」「教科等や総合的な学習の時間の目標」を明確した上で、いかに地域の教育資源（ひと・もの・こと）を活用するか、という視点が大切になってきます。

コラム



以前勤めていた学校でのこと。

その先生が授業のため少し早めに教室に行ったところ、窓際に挙動不審な女子3人組を見つけました。校内でもよく話題に上がる生徒たちだったので、“…こりゃお菓子か何か、食べてたか!?” と思い、

「いま、隠したもの出してごらん!」

と声をかけると、机の下から差し出したのは『おにぎり』、それも自分で作ってラップでくるんだやつ…でした。この生徒の家庭は、母親の夜勤明けだと、なかなか朝食を作ってもらえない家庭でした。そのことを知っていた先生は声をかけたものの思わず“胸がキュン(本人談)”と来て、

「もうここで食べちゃだめ! どうしようもないときはこっそり相談しんちゃい。」

と、その場をおさめたんですよ…、とのこと。子どもたちはいろいろな生活を背負って学校にやって来ています。その子の生活を知っているからこそ、とっさに言える・感じられることがあります。そんなことをしみじみ思った出来事でした。(M)

